



月刊 第 571 号

来年は

東京寺泊会五十周年

新年を迎えたと思っていたら、忽ち二月号発行の日が迫っている。二月一日即ち二月の第一日曜日恒例の東京寺泊会へふるさとだよりを代表して出席。ふるさとと寺泊も勿論東京もいよいよ春



裏山から町の様子を紹介してみました。
 聚感園の上から大町、旅館街、港が一望されます。
 家並みはすっかり変わりました。



魚のアメ横裏山からの写真です。田町の一部から海岸部、テニスコート、駐車場、その先に広がる砂浜。左手の方は波打際まで700メートルもあります。



愛宕神社の上まで昇ると野横方面への眺望が開かれ、新島崎川(ズイドウ)から文化センター砂防林の中に下水道処理施設、そしてコロニー、分水河口へとつづきます。

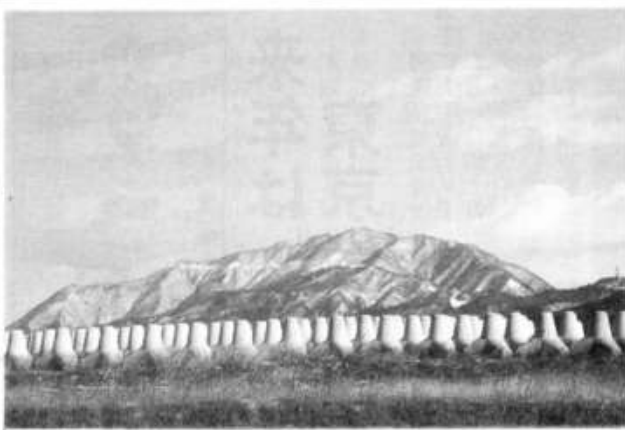
が体調不調で欠席、ふるさとだよりの方で何とかピンチヒッター場継ぎをして下さいとの依頼。感無量の思いも忽ち断絶。松井さんとは個人的に時々燈台沖の海の中(彼は夏休みに必ずモリを片手に現れ結構な獲物をゲットする)でお逢いするのでそんなエピソードから寺泊の冬の味覚、寺泊の蛸は日本一旨いタラの煮付の煮凝った味は誰もが愛する郷土の味なのだが最近は何やら地物の鰯が地元でも口に入らないなどなんとか話を継ぎながら雪鶏(ゆきにお)の話をしつら

いるとのお話、又県人会婦人部代表で来賓の吉沢米子さんは刈羽郡の出身で村で共同の雪鶏を作り病人の水枕などに使った等の話をうかがった。寺泊でニオと言えば主に冬期間の焚物の為のニオ積みニオ入れでどこの家でも年中行事にされていたのは戦後いつ頃までだったであろうか。

毎年分水会、弥彦会との交流がありお互来賓を招待し合っている間柄、本来なら愈々同じ市民となる喜びを分かち合えるところだったのですが残念乍ら言葉も曇り勝ち。ともあれ来年は記念すべき五十回の集いである。多勢の方からお集り頂き賑わしくふるさとを語り合う集いになることを念じて止みません。

東京会へ顔を出される人達は故郷への思い入れが一段と濃いわけで、町代表で出席の古沢助役伊勢塚議長青木課長には町村合併の状況を詳しく聞かせて頂きたいとの注文で、丁度三町村合併が決裂、苦悶の最中のこととて嬉しい話も出来ず而も寺泊会では偶々のことではあるが

ここで悲しいお知らせすることになります。藤の井月子さんが二月十日朝逝去されました。国立劇場への出演又東京会へも招待され、町の伝承芸能保存に尽力され町功労者として又県文化財保存連盟からも表彰を受けられました。民謡研究家として



随道川を渡り工事道路を浜へ出るとテトラの一群が目にとび込む。海の荒れる季節はここでテトラポットが作られ春を待つ。弥彦山はまだ冬の装いのままである。



立春を迎える前夜、大町祖師堂で節分行事が行われる。昔日の子供の姿はなく法福寺講中の読経につづいて福寄せの豆まきが行われた。



今年は寒風吹き荒れる中での涅槃会となった。昔からのオシャカさまのだんごまきである。だんごは春山のマムシよけと言われる。

活躍中の竹内勉先生も馳けつけられエピソードを混えて弔詞拝読、十八日にはNHKラジオで特別番組を組んで下さった。

聞き書き閑話

磯町 阿部 茂一

浪曲界の大御所と言われ昭和五年「佐渡情話」で全国に米若ブームを起こした寿々木米若さんが寺泊に住んでいたことがある。

NHK新潟放送局「越佐の年輪」によれば寿々木米若本名藤田松平は現在の新潟市曾野木で明治三十二年四月五日生れた。彼の生家は当時大変貧しく特に大正六年の曾川切れの洪水で多額の借金を抱えることになった。

大正九年二十一才の松平は浪曲師を志し上京叔父に当たる寿々木米若の弟子となり順調に頭角を顕し昭和八年東西浪花節人気番付では横綱の地位を得た。

その入門前即大正六年から九年までの三年間分水工事の工夫として寺泊で働いていた。その間港町の松永家(現吉井宅)や白岩の鴻の巣家(現小黒宅)の裏の長屋に宿泊していた。分水工事の現場では昼休みに

は仲間達が彼ののどを聞くのを楽しみにしていた。いよいよ彼が東京に行くことになり人夫の仲間や上司が饞別を集めて贈りお別れの席が坂井町の定右エ門方(山岡靴屋)で設けられ最後ののどを聞いた。

このことを知っている生存者はもう居られないかも知れないが、当時現場で人夫頭をしていた坂井町の米谷七造さんからの聞き書きです。

米若は昭和四十四年浪曲界で初めて勳四等瑞宝章を受章した。昭和五十四年十二月二十九日自らの経営する伊東の「よねわか荘」で八十年の生涯を閉じた。

少年時代のいよ

大町 松田 圭司

法福寺前から石元の小路を浜へ下ると田甚あたりから東屋呉服店、みのや旅館藤田屋旅館住吉屋旅館と三軒の旅館が連なりその裏手にはコンクリートの護岸が築かれており、その数メー

トル先には自然石の防波堤があり潤間瀬の突堤と交叉して片町から上荒町まで続いていました。波の荒い日にはその防波堤を越えて波が押し寄せ、住吉屋や大越酒屋の裏座敷が太い柱で支えられて海に張り出し、その柱の間を波の息をうかがって走り渡るのも子供達の遊びの一つでした。

海岸での思い出に寺泊では冬になると、荒れた後には様々な物が岸に打上げられ思わぬ拾い物に出会ったりする所謂「浜廻り」の楽しみがあります。一般的には神馬藻やタリイカハタタの子などであり、大物では八十キロものマグロ、又戦時には機雷や小型の爆発物など

言う物騒な物までありました。その中に畳二帖もあろうかと言うクラゲが波で砕けてひと抱え程の固りになって無数打上げられ子供達はドーランと呼んで上に乗ったり足で蹴飛ばしてみたりしたものでした。又信濃川上流からと思われた葦やすすきが細かく砕けたようなゴミが港内の岸にうす高く流れ寄って一メートル程の層が何層も堆積して、空中転回などの練習に格好の遊び場となるのでした。海藻に生みつけられたハタタの卵は今では考えられぬ程沢山流れ寄り當時各町内に一軒はあった一文店にウミホウズキなどと並んで売られていました。そのモッコの山も春になるときれいに流れ去

の中は機雷や小型の爆発物など

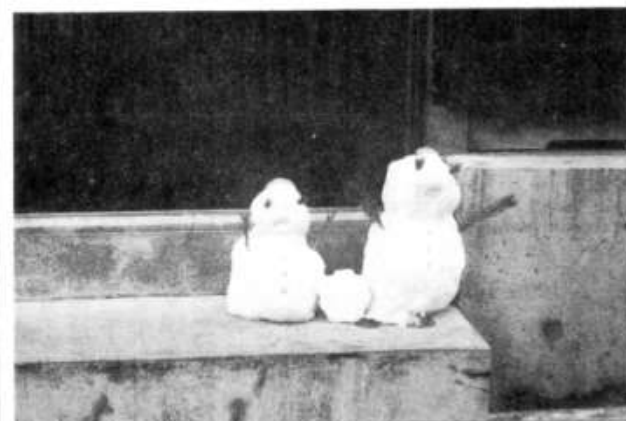


東京寺泊会 平成16年度(第49回)通常総会

2月1日恒例の東京寺泊会が芝パークホテルで開催され50人程の郷土人が集った。今年で49回目。明年は50回の記念大会となる。三上会長の挨拶。



町最後の芸妓 藤の井月子姐さんが2月10日享年九十才で亡くなられた。月ちゃんと言えば町中知らない人はない。町の伝承芸能保存に尽力、町功労者として表彰された。



子供達にとって雪は嬉しいものである。最近は何日も雪があることは珍しい。早速家の前に可愛い雪だるまがお目見え。

炭を焼く人

さとう・のぶひと

り船場の頃にはそこは網の干場になったものです。(次号へ)

先月号で、寺泊はまた今年も暖冬で少雪、とお伝えしたばかりなのに、一月下旬に降り、続いて二月に入ってから、思いもよらぬ大雪になりました。吹き溜まりでは四十センチ近く積もりました。早朝、除雪車が出動し車庫前に排雪するので、クルマが出られる程度にスコップを振るわなければなりません。そんな日が二日続きました。除雪車が寄せた雪は固くて重く、作業には汗をかきます。

ため道路が寸断されています。工事が休みの、土日にかかった大雪だったのが幸いしました。平日でしたら、クルマの渋滞はやむなしというところですが。しかし、あれほど猛烈に吹雪いたのに、いったん風が収まってしまふと暖気がやってきて、みるみる溶けていきます。暦は正直なものです。立春過ぎの雪とはこんなものです。

今日、二月十一日は祭日でお休みです。昨夜は一面の星空で、低く大きな赤い月が出ていました。放射冷却で夜間かなり冷え込んだようです。朝、起きると水道の蛇口が凍結していて、しばらく水が出ませんでした。こんなことは今年初めてです。立

春を過ぎたといえ、冷え込みは依然厳しく寒中を実感しました。凍結した蛇口からやっと水が出始めるころ、電話がありました。京ヶ入の竹内さんという方で、自宅の裏山で炭焼きをしています。寺泊で炭焼きをする数少ない方です。カマドに火入れをするので見に来ないか、と言うのです。以前、炭を焼く時はぜひ呼んでほしいと頼んだことがありました。

筆者はかなり前、炭焼きにあらがれ、ドラム缶やトタン板を使って真似事をした経験がありますが、散々な目に遇いました。竹内さんの炭焼きカマドは、煉瓦を粘土で固め、空気を完全に遮断するため、周りをコンクリー

トのブロックで囲って砂を詰めたりあります。これほどの炭焼きカマドは、寺泊ではここだけではないでしょうか。

炭にする原木は、乾燥した楢の木と竹です。筆者がうかがった時、すでに焚き口の近くまで原木が詰め込まれていました。焚き口の目一杯まで原木を詰め、石の蓋をします。点火した後、火が回るまで空気穴はそのままにしておきます。火が回ったら、焚き口を粘土で完全に塞ぎます。

煙だけ見て勘にたよると失敗する、と言っていました。排煙口からはもちろん、木酢液を採取します。

残念ながら都合で、今回は火入れまでとどまることができませんでした。

火鉢から発する木炭の柔らかい暖かさが好きです。でも、暖房用としての木炭は、ほとんど需要が見込めません。

しかし今、木炭と木酢液は、汚染された環境の復原と改良に役立つことが立証されています。二十一世紀のキーワードの一つに「環境」が挙げられています。木炭と木酢液はもっと見直されていいはずですよ。

平成15年度ふるさとだより会計報告

収入の部		支出の部	
1月	272,000円	編集関係費	312,000円
2月	238,000円	印刷関係費	621,285円
3月	137,000円	郵送費	462,720円
4月	163,000円	事務費	234,350円
5月	90,000円	雑費	55,040円
6月	48,000円	合計	1,685,395円
7月	79,000円		
8月	217,000円	平成15年12月31日現在残高	
9月	63,000円	通帳残高	953,684円
10月	58,000円	振替	216,000円
11月	76,000円	財産保有総額	1,169,684円
12月	202,000円		
合計	1,643,000円		

いつも御協力を賜り感謝申し上げます。
 今月も一人3,000円を納めて頂きながらお名前が不明で掲載してない方がおられます。どうぞ封筒等には必ず記名されてお届け下さいますようお願い申し上げます。

小波会新年詠草

兼題 年の内・雑煮他当季
 朝まだき
 杵音遠き年の内
 能登 頑牛

あれこれと
 気ばかり急ぐ年の内
 外山 海子

年の内
 葉調う小引き出し
 外山きよし

何よりか
 始めむ老の年の内
 斎藤 紫苑

蒲鉾の
 紅き彩り雑煮餅
 小島 温石

変りなき

ことがめでたし雑煮餅
 小島 冬扇

蔵人の
 法被まぶしく雑煮餅
 大越碧水子

雑煮喰ふ
 展転鮭卵朱き椀
 内藤 蓮子

雑煮膳
 母の遺愛の蒔絵椀
 小形 美代

元且や
 おんぶにだっこ弥彦行き
 江原 汀子

波に波
 砕けて冬の日本海
 中村 流瓢

誌代御後援(敬称略・順不同)

東京都	五十嵐重尾	金三千元
〃	竹田 秀雄	金五千元
〃	納谷 トシ	金三千元
〃	樋口 田鶴	金一万円
〃	渡辺 賢一	金一万円
〃	古瀬 和子	金三千元
〃	三上喜久治	金一万円
〃	広田 勝	金五千元
〃	滝沢 初子	金三千元
〃	小泉栄美子	金三千元
〃	神田 怜子	金三千元
〃	小林 艶子	金三千元
〃	笹野 京子	金三千元
〃	佐野 久治	金一万円
〃	本間 静栄	金五千元
〃	石原 勇一	金五千元
〃	橋本 寛二	金五千元
〃	下鳥 ハル	金三千元
〃	大森 芳子	金三千元
〃	田中 澄江	金三千元
〃	渡部 作次	金五千元
〃	古川原 実	金一万円
〃	栗山セツ子	金三千元
〃	梅沢 正巳	金三千元
〃	田口 稔	金五千元
〃	直井 昌子	金三千元
〃	江森 タイ	金一万円
〃	金内 勲	金五千元
〃	新潟市 朝芳	金五千元
〃	加須市	
〃	立川市	
〃	横浜市	
〃	あきる野市	

初茜
 越後連山染めにけり
 竹内 霍山
 初明り
 金の家紋の鬼がわら
 加勢 白汀
 雪起し
 話の花も散りにけり
 水沢 蕉子

あとながき

今夜もゴウゴウと海と松が鳴りつつけています。明日午後四時からNHKラジオ第一放送で月子姫さんの追悼特別番組が放送されると言うことでお別れはお別れとして楽しみにしています。十三日の葬儀はストーブも不要な程に晴れわたったお天

新潟市	天野 吉司	金三千元
〃	足立 ミヤ	金五千元
〃	野沢 英雄	金三千元
〃	斉藤 幸子	金三千元
〃	岩船美津子	金三千元
〃	石川眞紀子	金三千元
〃	岡田屋呉服店	金三千元
〃	梅沢酒店	金三千元
〃	長谷川昭平	金五千元
〃	長谷川昭二	金五千元
〃	久乃 屋	金五千元
〃	住吉 勘一	金三千元
〃	三輪三十郎	金三千元
〃	山沢 忠義	金三千元
〃	大 三 庄	金三千元
〃	土田 明	金三千元
〃	志田嘉一郎	金三千元
〃	江原 龍郎	金三千元
〃	外山 辰司	金三千元
〃	岩船三三三	金五千元
〃	山崎三代次	金三千元
〃	星野 勇	金三千元
〃	南雲 茂	金三千元
〃	外山 四郎	金三千元
〃	小岩井孝三	金三千元
〃	鳴海 忠夫	金三千元
〃	石塚 哲夫	金五千元
〃	野沢 操	金三千元
〃	成田 昭	金三千元
〃	能登喜代二	金五千元

毎月二十日発行
 寺泊ふるさとだより
 誌代税共(百円)
 編集人 中 村 興 樹
 発行人 新 潟 県 寺 泊 町
 発行所 新 潟 県 寺 泊 町
 ふるさとだより
 郵便番号 九四〇二二五〇二
 ダイヤル局番 〇二五八七五
 電話 二〇二二九七
 振替番号 〇〇六二〇三二七四五
 印刷所 吉野印刷株式会社

遅くなりましたが平成十五年の会計報告を掲載させて頂きました。小川弘子さんが会計を担当して下さい。大変御苦労さまです。若しおたずねの件などありましたら遠慮なくお申出下さい。ご協力への領収書等発行しません。ご号への掲載を以て替えさせて頂いてありますのでこれ又間違いないと思っております。又編集内容についてのご意見又寄稿もよろしく。スタッフ一同心より感謝御礼。